

「第四十回庭野平和賞」贈呈式 挨拶

公益財団法人庭野平和財団 名誉会長 庭野 日鑽

「第四十回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、挨拶を申し上げます。

庭野平和賞の贈呈式は、昨年までの三年間、新型コロナウイルスの感染拡大によって、オンラインでの開催を余儀なくされました。今年は、四年ぶりに対面形式で開催することができます。

受賞者はもちろんのこと、庭野平和賞委員会の皆さま、各界からご参集の皆さまに直接お会いできますことは、何よりの喜びであります。

庭野平和賞は、今年で第四十回という節目を迎えました。一九八三年、ブラジルのヘルダー・カマラ大司教様に「第一回庭野平和賞」をお贈りして以来、回を重ねるごとに広く知られるようになり、今日では「宗教界の平和賞」として評価を頂いております。

とりわけ二〇〇三年、世界各国の宗教者で構成される庭野平和賞委員会が設立されてからは、より幅広い見地で受賞者の選考ができるようになりました。私自身、この平和賞を通して、素晴らしい活動をされている方々が、世界各地に大勢おられることを実感し、また各地域で身を賭して働く受賞者の姿に接し、深い感動を覚えると共に、数多くの学びを得ることができました。

庭野平和賞は、これまで三十一の個人、八つの団体に贈られてきました。

活動の種類も人権擁護、紛争調停、軍縮、核兵器廃絶、武器輸出の削減、平和教育、人材育成、地球環境保護、女性の地位向上、過激主義からの脱却、HIV／エイズをめぐる諸問題の解決など、非常に多岐にわたります。受賞者の宗教的な背景も異なります。もちろん活動する地域もそれぞれです。

しかし、受賞者の方々には、一つの共通点があります。それは、すべて受賞者が、深い愛の心、慈悲の心に突き動かされるようにして、活動を進めてこられたことです。

そうした宗教的な精神に裏づけられた活動を顕彰するのが、庭野平和賞の大きな特長であると私は受けとめております。

今後も、庭野平和賞委員会の皆さまのお力添えを頂きながら、愛と慈悲の心で現代の諸課題に取り組んでいる方々に光を当ててまいりたいと思います。

そして本日は、記念すべき「第四十回庭野平和賞」を、インドで非暴力による社会活動を進められているラジャゴパールP・V・氏に贈呈いたします。ラジャゴパール氏は、今回が初めての来日と伺っております。（また本日は、奥さまもお見えになっています。）遠路はるばる、おいでくださいました。誠にありがとうございます。

加えて、選考にあたられた庭野平和賞委員会の皆さまに、深く敬意を表し、お礼を申し上げたいと存じます。

只今、贈呈理由をご紹介頂きましたが、ラジャゴパール氏は、マハトマ・ガンディーの精神を受け継ぎ、インドの農村地域に住む先住民、不可触民の基本的な生活権を得るため、インド政府との対話を求める非暴力的な行動として、大規模な徒歩行進などを農村の人々と共に実施してこられました。

同時に、非営利組織の「エクタ・パリシャド」を設立し、農村の若者を対象にしたリーダー育成に力を注がれています。

インドでは、特に先住民、不可触民の方々が、企業などに土地を奪われ、非常に苦しい生活を強いられています。そうした弱い立場にいる人々は、しばしば直接的な暴力の被害者となります。しかし、ラジャゴパール氏は、単に直接的な暴力にばかりに目を向けるのではなく、構造的な暴力、制度的な暴力、つまり間接的な暴力を注視し、それをなくさなければインドの現状は変わらないと訴えられています。

ラジャゴパール氏は、次のようにいわれます。

「搾取や貧困は、すべて構造的な暴力です。そして、構造的な暴力、制度的な暴力は、直接的な暴力の温床になると私は考えています。ですから、直接的な暴力の機会を与えないため、間接的な暴力にどう対処するかを若者自身に考

えてもらうのです」と。

さらに、こう提言されています。

「非暴力は、受動的なものではありません。私たちの大半は非暴力主義者ですが、暗に暴力的なシステムに貢献してしまっています。例えば、私たちの消費行動によつてです。何を買う、何を買わないか。それが搾取などの暴力を助長するかしないかを決定するのです。ですから、どうすれば積極的非暴力主義者になれるのかを若い人たちと考えることが非常に重要なのです」と。

このことは、日本に住む私どもも、常に心していかなければならないことでもあります。

インドでは本来、カーストによる差別は憲法で禁止されています。ところが、いまだ社会から疎外されている人々が大勢います。

ラジャゴパール氏によると、農村部の若者は、いわゆる前世からのカルマを信じやすく、現世をあきらめて、来世に期待を抱く人が少なくないといいます。そのため、現世での不正を受け入れ、貧困を受け入れ、搾取を受け入れ、腐敗を受け入れてしまいがちだと憂慮されています。

「エクタ・パリシャド」が実施しているトレーニングでは、希望を持ってない若者に対して、自分の存在意義を理解させ、社会とのつながりを見出し、自信を取り戻すことができるよう、さまざまなプログラムが用意されています。

トレーニングの最終日になると、自分の可能性に気づき、やる気がみなぎって、いまにもロケットのように飛び出していきそうな若者が、数多く見られると伺いました。

こうした自己の尊厳に目覚め、非暴力による社会活動の重要性に気づくトレーニングを、ラジャゴパール氏は、三十年余にわたって続けてこられました。この地道な積み重ねが、世界的に注目を集めた数万人にも及ぶ大規模な徒歩行進に結実したのであります。

改めて深く敬意を表したいと存じます。

私は、こうしたラジャゴパール氏の活動に触れ、仏教の説く「地涌の菩薩」を思い起こしました。

「地涌の菩薩」とは、大地から湧き出てくる菩薩のことです。高い地位や権力を持っている人々ではなく、苦悩の多い現実の生活を体験する中で、仏の法を求め、黙々と精進する名もない人々のことです。仏教の開祖である釈尊は、この「地涌の菩薩」に娑婆世界の救いを任されました。

このことは、何を意味しているのでしょうか。

人間の現実の問題は、結局、人間自身が解決すべきものであり、誰かが救ってくれると思ひ、それを待っていたのでは、解決されないということであります。

自分自身が仏の心を持ち、自分の責任として、社会や国、世界が良くなるように努力する人が、大地から湧き出すように次々と現れ、連帯していかない限り、世の中の本当の調和、平和は、実現しないということです。

ラジャゴパール氏は、まさにそうした「地涌の菩薩」を育ててこられたのだと私は受けとめています。

この世のさまざまな問題に取り組み、本質的な解決に導いていくには、遠回りのようでも人材の育成が欠かせません。特に若者は、未来への光であり、彼らが参加することによって、新たな発想を基にした創造的な展開が期待できます。そのことを通して、やがてはインドの社会も大きく変化する時が来ると信じています。

ラジャゴパール氏の経験や知見を、今後もより多くの人々にお伝え頂き、共に生きる世界に向け、一層リーダーシップを発揮してくださることを念願してやみません。

本日の贈呈式を契機として、ラジャゴパール氏の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。